

東京古田会8月月例会リモート講演  
(2026年8月29日(土)13時~)

『日本書記』の記事移動(1)

# 『書紀』が隠そうとした 倭国(九州王朝)の王たちの事績

- ①「干支の巡り」をもとにした記事移動(60年・120年)
- ②白村江敗戦以前の記事の天武・持統紀への繰り下げ(34年)
- ③九州年号を利用した年号変換による記事移動

\*時間の関係上、今回は第1回として「干支60年周期を利用した1運または2運の年次移動を取り上げる

## 1、『日本書紀』の記事移動

- (1)『書紀』に散見される「年次移動の類型」
- (2)干支循環と神功紀の2運繰上げ
- (3)新羅討伐と神功紀の2運繰上げ
- (4)2運繰上げで隠した4世紀の倭王旨

## 2、南島諸国朝貢の1運(60年)繰下げ

- (1)多禰島人朝貢の1運(60年)繰下げ
- (2)多禰島人が朝貢した「京」は太宰府
- (3)南島人・隼人一斉朝貢の1運(60年)繰下げ

## 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ

- (1)600年に征戦があった?
- (2)600年の新羅戦は540年の事実
- (3)601年の新羅戦は541年からの繰下げ
- (4)622年の新羅戦は562年からの繰下げ
- (5)60年前と同じ大將軍・副將軍での新羅討伐

# 『日本書紀』の記事移動(Ⅰ)『書紀』に散見される「年次移動の類型」

## 『書紀』に散見される「年次移動記事」

大和朝廷成立時代の8世紀初頭の720年に編纂された『日本書紀』には、重複記事や、他の史書との比較で年次がずれていることがわかる記事、制度や事績が時代的に整合しないものがある。「『日本書紀』の記事移動について」では、その中に「偶然」や「誤り」でなく「意図的に年次をずらされたものがある」ことを、具体的な記事を上げて述べていく。

不思議な記事  
には理由がある  
のです。



## 年次移動の主要3パターン

『書紀』には多くの年次移動記事があるが、その中で定型化（パターン化）しているものに主要な3ケースがある。

### 1、「干支の循環」に基づく記事移動

干支は60年で1巡するから、同一の干支年に繰り下げ・繰り上げたりするケース

### 2、白村江敗戦後（戦後34年間）の記事を戦前記事に入れ替えるケース

主には、常色元年に即位した九州王朝の天子（647年～661）の事績を34年繰り下げて天武や持統の事績とする。

### 3、九州年号をもとに年次を繰り下げ・繰り上げたりするケース

例えば白雉〇〇年を朱鳥〇〇年に、白鳳△△年を朱鳥△△年になど）

これらは、九州王朝の事績をヤマトの天皇の事績に見せるための、『書紀』編者（大和朝廷）の詐術と考えられる。以下順次述べていくが、まずわかりやすい「干支循環」に基づく年次移動から始める。

| 皇号 | 年号  | 歴       | 皇号  | 年号      |
|----|-----|---------|-----|---------|
| 天武 | 1   | 12 638  | 舒明  | 10 僧要 4 |
|    | 2   | 13 639  |     | 11 5    |
|    | 3   | 白14 640 |     | 12 1    |
|    | 4   | 15 641  |     | 13 2    |
|    | 5   | 16 642  | 皇極  | 1 命 3   |
|    | 6   | 17 643  |     | 2 4     |
|    | 7   | 18 644  |     | 3 長 5   |
|    | 8   | 鳳19 645 | 大孝化 | 1 6     |
|    | 9   | 20 646  |     | 2 7     |
|    | 10  | 21 647  |     | 3 1     |
|    | 11  | 22 648  |     | 4 常 2   |
|    | 12  | 23 649  |     | 5 3     |
|    | 13  | 朱1 650  |     | 1 色 4   |
|    | 14  | 雀2 651  | 徳白雉 | 2 5     |
| 持統 | 朱鳥1 | 1 652   |     | 3 1     |
|    | 1   | 2 653   |     | 4 2     |
|    | 2   | 3 654   |     | 5 白 3   |
|    | 3   | 4 655   |     | 1 4     |
|    | 4   | 5 656   |     | 2 5     |
|    | 5   | 鳥6 657  | 斉   | 3 雉 6   |
|    | 6   | 7 658   |     | 4 7     |
|    | 7   | 8 659   |     | 5 8     |
|    | 8   | 9 660   | 明   | 6 9     |
|    | 9   | 1 661   |     | 7 1     |
| 文武 | 10  | 2 662   | 天智  | 1 2     |
|    | 1   | 3 663   |     | 2 鳳 3   |
|    | 2   | 4 664   |     | 3 4     |
|    | 3   | 5 665   |     | 4 5     |
|    | 4   | 6 667   |     | 5 6     |



# 『日本書紀』の記事移動(2)干支循環と神功紀の2運繰上げ

## 1、「干支の循環」(「60年で1巡する干支」)をもとにした記事移動

始めに「干支の循環」即ち「60年で1巡する干支」をもとに行われる記事移動を検討する。

### (1)よく知られている「神功紀」の2運120年繰上げ

『書紀』では「干支を同一とする年に繰り上げ・繰り下げる記事移動手法」が用いられている。これは神功紀の「2運(120年)繰上げ」記事から分かっている。

①『書紀』は神功皇后と「倭女王」(卑弥呼・壹與)を『倭人伝』の年次に合わせ同一人物を装う。

◆『書紀』神功39年(己未239)是年、大歳己未。魏志に云はく、明帝の景初3年(己未239) (『魏志倭人伝』では景初2年) 6月、倭の女王、大夫難斗米等を遣し、郡に詣り、天子に詣らむことを求めて朝献す。

◆『書紀』神功66年(丙戌266)。是年、晋の武帝の泰初(始)の2年(266)なり。晋の起居注に云はく、武帝の泰初(始)の2年の10月に、倭の女王、訳を重ねて貢獻せしむといふ。  
⇒壹與の朝貢

②一方、新羅・百済の成立は4世紀なので、神功の新羅討伐も4世紀以降のこととなる。

『書紀』で神功は200年、249年、262年の3度にわたり新羅討伐を行ったと記す。しかし、史料上で新羅の出現は、『秦書』前秦の世祖宣昭帝の建元13年(377)、新羅国王楼寒(ぬはん) (「奈勿尼師今(なこつにしきん)」とも。即位356)の前秦への朝貢記事が初。百済の出現は、『晋書』帝紀、咸安2年(372)正月、百済の近肖古王(即位346)の東晋への朝貢記事が初。

⇒3世紀の新羅討伐記事は100年以上繰り上がっている。



神功の事績に



## 『日本書紀』の記事移動(3)新羅討伐と神功紀の2運繰上げ

神功紀の新羅関係記事は外国史書から「2運120年繰り上げ」られていることが確認されている

①120年繰り上げられた肖古王(しょうこおう)薨去記事:㊦『書紀』神功55年(乙亥255)。百濟の肖古王薨せぬ。㊧『三国史記』近肖古王30年(乙亥375)11月王薨

② 120年繰り上げられた貴須王(きすおう)薨去記事：㊦『書紀』神功64年(甲申264)百済の貴須王薨りぬ。㊧『三国史記』近仇首王(\*貴須王)10年(甲申384)夏四月、王薨。

## 神功皇后の新羅討伐・七国を平定の実際は120年後の4世紀

◆神功皇后49年(己巳249・実年は2運120年後の369年)

3月、卓淳国に至り、新羅を襲はむとす(略)俱に卓淳に集ひ、新羅を撃ちて破りつ。因りて、比自焮(ひしほ)・南加羅・喙(とく)国・安羅・多羅・卓淳・加羅七国を平定(ことむ)く。仍ち兵を移し、西に廻り古爰津(こけいつ\*全羅南道康津)に至り、南蛮の枕彌多禮(とむたれ\*済州島)を屠き、百済に賜ふ。是に其の王肖古王、及び皇子貴須(近仇首王)、亦軍を領みて来会(まうけ)り。⇒

『書紀』の神功のモデルは369年に新羅を平らげ半島七国を平定

百済王は大いに感謝し、これを契機に369年に百済と倭国の盟約（辟支山（へきさん）の盟約）が結ばれ同盟が成立。その感謝に「7支刀」が倭王旨に贈られる。

◆『書紀』神功49年(249・実年369)。千熊長彦と百濟王と、百濟国に至りて、辟支山(\*全羅北道金堤)に登りて盟ふ。・・今より以後、千秋萬歳に、絶ゆること無く無窮ること無けむ。常に西蕃と稱(い)ひつつ、春秋に朝貢(みつきたてまつ)らむ。」とまうす。

◆『書紀』神功52年(252、実年372)9月丙子(10日)、久氏等、千熊長彦に従ひ詣る。則ち七枝刀一口・七子鏡一面・及び種々重寶を献る。





# 『日本書紀』の記事移動(4)2運繰上げて隠した4世紀の倭王旨

## 七支刀記事と隠された4世紀の倭女王

「倭王旨」とは誰か

◆(表)泰(和)四年(369)五月十六日丙午正陽造百練□七支刀出辟百兵宜供供(侯)王。  
(裏)先世以来未有此刀百濟(王)世□奇生聖音故為倭王旨造(傳示後)世

七支刀には「泰和4年(369)」の年紀と「為倭王旨造」の銘文があり、4世紀後半に百濟王が倭王へ贈ったことを示す金石文といえる。一方、『書紀』神功52年(252)条には、百濟(\*肖古王)からの七枝刀献上と、「谷那鉄山」の鉄を将来に涉って倭国に供給することが約されている。**辟支山の盟約が結ばれた神功49年(249)の実年が120年後の369年であれば、この時に七枝刀が造られ、272年に倭王に贈られたことになる。**

◆『書紀』神功52年(252・実年372)「臣の国の西に、水有り(\*漢江)、源は谷那鉄山(忠清北道忠州市弾琴台土城付近)より出ず。其のとおきこと七日行けども及ばず。當に是の水を飲み便(まさ)に是の山の鉄を取りて、以て永く聖朝に奉らむ。…」(七支刀の鉄はこの鉾山の鉄。近年製鉄遺構が発見される。)

369年は『書紀』編年では神功159年に相当するから「倭王旨」はヤマトの神功ではなく、当時半島に進出していた倭王(倭女王)であり、『書紀』はこの事実を繰上げて神功に擬え隠したことになる。

## 筑後の伝承では高良玉垂命が367年に博多湾岸から筑後三瀨に遷宮

**初代の高良玉垂命は仁徳55年(367)に博多湾岸から筑後三瀨に来て、同56年(368)に賊徒を退治。同57年(369)に高村(大善寺の古名)に宮を造営し筑紫を治め、同78年(390)に三瀨で没した。**

(『大善寺玉垂宮由緒書』) \*万葉4261番「大王は神にし座せば**水鳥のすだく水沼を皇都となしつ**」(筑後川河口の三瀨は渡り鳥が飛来し、営巢する地域だった。)歿直後の391年、『好太王碑』に倭の大規模な朝鮮半島進出が記される(「倭、辛卯年を以て来り、海を渡り、百残・加羅・新羅を破り、以て臣民となす」)



弾琴台土城出土鉄鋌



5  
三瀨大善寺玉垂宮

## 2、南島諸国の朝貢(1)多禰島人朝貢の1運(60年)繰下げ

『書紀』では屋久島とは7世紀初頭から頻繁な交流があったと記す

①掖玖人の朝貢は『書紀』推古24年(616)②漂着は『書紀』推古28年(620)③屋久島への使い派遣は舒明元年(629)

④『隋書』にはこれ以前の交流も記す。(多利思北孤の使者が夷邪久国を認識)

◆大業4年(608)帝、寛をして之を慰撫せしむ。流求從はず。其の布甲を取りて還る。時に倭国の使來朝し、之を見て曰はく、「此れ夷邪久国人の用る所なり」といふ。

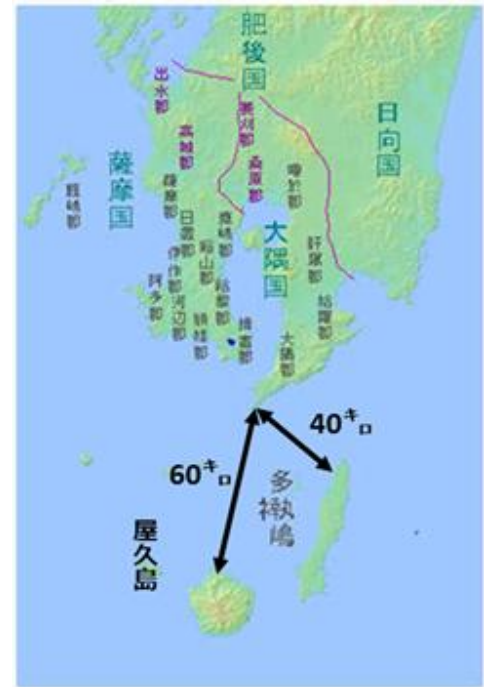
『書紀』では多禰島人の朝貢は天武6年(677)とある

①『書紀』での初出は天武6年(677)の多禰島人への饗宴記事◆天武6年(677)2月。多禰島人等に、飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。②多禰島への使者派遣は天武8年(679)③天武10年(681)に使者が帰国し地理を報告

種子島の交流が屋久島より60年遅いのは不可解

「掖玖人(屋久島人)」とは推古・舒明紀に頻繁な来朝記事がある(616~)。ところが屋久島より九州島に近く、耕地も広く人口も多い「多禰国(種子島)」との交流記事が約「60年」も後の天武時代(677~)というのは不可解。

「掖玖人ばかりやって来たのは、少しおかしい。掖玖が現在の屋久島なら、当時も人が遥かに多いはずの種子島や、他の隣接諸島民の記述がないのはおかしい」(下野敏見『南九州の伝統文化』)



謎を解く鍵は天武10年(681)に帰還した使者の多禰国の地理についての報告にあった



## (2)多禰島人が朝貢した「京」は太宰府

謎を解く鍵は「京を去ること五千余里」に

◆天武10年(681)8月。丙戌(20日)に、多禰島に遣しし使人等、**多禰国の図を貢れり**。其の国の、**京を去ること、五千余里**、筑紫の南の海中に在り。

律令の1里は約530mで「五千余里」とは約2700km。**「京」を大和飛鳥とすると**、種子島まで700~800kmで**全く合わず**、倭人伝ほか『三国志』に用いられた短里(75~76m)でも約400kmでこれも一致しない。ところが、**「京」を筑紫・太宰府だとすれば**、種子島まで有明海経由の航路で約380kmと、**「短里」で算定した距離と一致する**。

多禰国記事は「1運60年前」から繰り下げられていた

①多禰国記事の有る天武6年(677)~天武10年(681)の「1運60年前」は617年~621年で、**掖玖人朝貢記事の推古24年(616)~舒明元年(629)と同時期**となり、かつ遣使は**多禰国が679年⇒621年、掖玖国629年と「九州島に近い種子島が先行する」という合理的な記事**となる。

②九州年号の**618年は「倭京元年」**。多禰国・掖玖国の朝貢先の「京」とは「倭京=倭国の京」で太宰府だった

③これは「阿蘇山有り」とする『隋書』の倭(倭)王多利思北孤の時代と一致する

『書紀』編者は「1運60年繰り下げる」潤色手法で倭国(九州王朝)の多利思北孤の事績を天武の事績にした

**【潤色の理由一『書紀』編者は何故そうしたか】**①多禰国は律令制定時に大和朝廷に逆らい討伐された。これを「多禰国は天武の時代に天皇家に恭順したので宴席も催し厚遇した。にもかかわらず、怪しからず反逆したので討伐した」と正当化できる。②一方掖玖国は『隋書』に見えるので年代をずらすことが出来ず、実年で記した。

◆**大宝2年(702)**8月1日、**薩摩・多禰**、化を隔て、命に逆ふ。兵を發し征討し、遂に戸を校(しら)べ、吏を置く。



### (3)南島人・隼人ら一斉朝貢の1運(60年)繰下げ

682年に隼人・掖玖人・多禰人・阿麻弥人が一斉に朝廷に伺候し禄に与り饗をうけ、楽・武芸を披露

◆**天武11年(682)**7月丙辰(25日)に、多禰人、掖久人、**阿麻弥人**に禄を賜ふ。戊午(27日)に**隼人**等に**飛鳥寺の西**に饗へたまふ。**種々の楽を発す**。(『隋書』王の朝会は必ず儀仗を陳設し、その国の楽を奏す。楽には**五絃琴**、笛有り)なお物賜ふこと各差あり。⇒**60年前は倭京5年(622)**で、**上宮法皇**はこの年「**法興32年(622)2月22日**」に登遐。**隼人や南島人たちは上宮法皇(多利思北孤)の法要か新天子利歌彌多弗利即位儀式参列の為に太宰府に來たのではないか。**◆『書紀』天武11年(682)秋七月甲午(3日)に、隼人、多に來て方物を貢げり。是の日に、大隅隼人と阿多隼人と朝廷に相撲とる、大隅隼人勝ちぬ。

|     | 『書紀』等の年次   | 屋久島関係      | 種子島関係                       | 奄美関係       | 1運前  |
|-----|------------|------------|-----------------------------|------------|------|
|     | 『隋書』608年   | 夷邪久国人の布甲   |                             |            |      |
| (1) | 推古24年(616) | 帰化(掖玖人)    | 『隋書』の多利思北孤の時代<br>(622年2月崩御) |            |      |
| (2) | 推古28年(620) | 伊豆に漂着(掖玖人) |                             |            |      |
| (3) | 舒明元年(629)  | 田部連掖玖派遣    | 利歌彌多弗利の時代<br>(623年~646年)    |            |      |
| (4) | 舒明3年(631)  | 帰化(掖玖人)    |                             |            |      |
| (5) | 天武6年(677)  |            | 饗宴(多禰島人)等                   |            | 617年 |
| (6) | 天武8年(679)  |            | 馬飼部造連多禰島派遣                  |            | 619年 |
| (7) | 天武10年(681) |            | 使人帰還、国の凶献上                  |            | 621年 |
| (8) | 天武11年(682) | 禄を賜う(掖玖人)  | 禄を賜う(多禰人)                   | 禄を賜う(阿麻弥人) | 622年 |



古田壬申大乱(上岩田遺跡の遺構を飛鳥浄御原宮、基壇の残る寺は飛鳥寺と呼ばれた可能性がある。)



682年の南方人の一斉朝貢は60年前の多利思北孤崩御と利歌彌多弗利即位の儀式参列の為だった



### 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ(1)600年に征戦があった？

『隋書』で「多利思北孤は征服戦を行わなかった（征戦無し）」と記すが、『書紀』では大規模な対新羅戦を遂行

『隋書』には「兵有りと雖も征戦無し」とあり、これは「多利思北孤は対外征服戦をしなかった」という意味。ところが『書紀』には推古8年(600)2月に大規模な新羅との戦が記されている。これはどういうことか？

◆『隋書』(倭国伝)「弓、矢、刀、稍、弩、讚、斧有り。漆皮を甲と為し、骨を矢鏑と為す。**兵有りといえども征戦無し。**その王の朝会は必ず儀仗を陳設し、その国楽を奏す。戸は十万ほど」

## 推古600年庚申に大きな対新羅戦が

『書紀』推古8年(600)2月。**新羅と任那と相攻む**。天皇、任那を救はむと欲す。

◆**600年は歳**、境部臣に命（おほ）せて大將軍とす。穗積臣を以て副將軍とす。〈並に名を關せり。〉則ち万余の衆を將て、任那の為に新羅を撃つ。5城を陷落させ新羅を降伏させ、（新羅の王、白き旗を挙げて將軍の下に到る）、6城の割譲と毎年の朝貢を約束させるが、將軍撤退後「新羅また任那を侵す」。

「600年が新羅戦の最中なら『隋書』に征戦無しとあるのはおかしいね。」



・推古9年(601)3月高句麗と百済に任那への支援を要請。9月に新羅の間者を対馬で捕らえる。11月に新羅攻撃が議論される。10年(602)2月久米皇子を将軍に任命、新羅討伐を命じ2万5千の兵を授ける。4月に筑紫志摩郡に駐在。6月久米皇子病に罹患し出撃中止。

これは①『隋書』の「征戦無し」に反し②「任那は既に滅んでいる」という歴史的事実に反する。『書紀』欽明23年(562)正月に、新羅、任那の官家を打ち滅しつ。〈一本に云はく、21年に、任那滅ぶといふ。総ては任那と言ひ、別ては加羅国・・10国なり。〉しかも600年には多利思北孤が隋の文帝に使者を送っているが、新羅戦の気配など全くない。◆『隋書』開皇20年(600)倭王、姓は阿每、字は多利思北孤、阿輩雞彌と号す。使を遣わし關(けつ)に詣でる。『倭王は天を以て兄とし、日を以て弟とす。天未だ明けざる時、出でて政を聴き跣趺(かふ)して坐し、日出ずれば便ち理務を停め、云う、我が弟に委ねん』と。妻は雞彌と号し、後宮に女六七百人有り。太子の名は利歌彌多弗利なり。



### 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ(2)600年の新羅戦は540年の事実

#### 「干支」の巡回を利用した『書紀』の年代移転手法

「干支」は60年周期で巡回する。そして、『書紀』では神功紀記事が「2運(120年)」繰り上げられていることが分かっている。これは『書紀』の編纂に於て、「干支の合う年に記事を移動(繰り上げ・繰り下げ)する手法が用いられた」ことを示すもの。

#### 600年庚申の60年前(干支一巡前)、540年庚申当時新羅の任那攻撃が激化していた

宣化2年(537)10月に新羅が任那を攻め、大伴連狭手彦が任那と百済を救援しており、これは新羅の任那攻撃が激化していたことを示す。⇒これを受け、欽明元年(540)庚申(\* 600年の60年前)の9月に「新羅討伐軍の規模・陣容を検討」。◆欽明元年(540)9月己卯(5日)に、難波祝津宮に幸す(\*尼崎市難波本町か現在の大阪市浪速区とも言われるが不明)大伴大連金村・許勢臣稻持・物部大連尾輿等従ふ。天皇、諸臣に問ひて曰はく、「幾許(いくばく)の軍卒(いくさ)をもて、新羅を伐つことを得む」(\*新羅を討つにはどれだけの兵が必要か)とのたまふ。物部大連尾輿等奏して曰く、「少許の軍卒をもては、易(たやす)く征つべからず(\*小規模の派兵ではだめで大軍が必要と答える)

#### 推古8年(600)記事が540年の出来事であれば任那攻防戦として自然な記事となる

推古8年(600)2月の「任那と新羅の交戦と任那救済企図」記事(新羅と任那と相攻む。天皇、任那を救はむと欲す。)が、60年前の540年のものであれば、537年記事にあるように激化する新羅と任那の紛争(新羅の侵略)に対応し、

①(\*推古8年(600)2月⇒実際は540年2月のこと)540年2月に任那救援を企図

②(\*欽明元年(540)9月条)9月に具体的な「軍容(陣立て)」を検討した。その結果「幾許の軍卒(少ない兵力)」では討伐は困難との結論となる。

少ない兵では困難なので「万余の大軍」を送り降伏させました。しかし新羅の降伏は偽りでまた侵略してきたのです





### 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ(3)601年の新羅戦は541年からの繰下げ

③そこで(推古8年(600)是年条⇒実際は540年)「境部臣らに命じ、『万余の衆』(大軍)で新羅を討ち」降伏させる。しかし、将軍が撤兵するとまた新羅は任那を侵略する。

◆推古8年(600)春2月に、新羅と任那と相攻(せ)む。天皇、任那を救はむと欲す。是歳、境部臣に命(ことおほ)せて大將軍とす。穗積臣を以て副將軍とす。〈名を關せり。〉則ち万余の衆を將て、任那の為に新羅を撃つ。(略)新羅に到りて、五つの城を攻めて抜く。(「新羅の降伏譚」略)。則ち使を遣して將軍を召し還す。將軍等、新羅より至る。即ち新羅、亦任那を侵す。

④翌年再び新羅討伐を検討◆推古9年(601)11月甲申(5日)。新羅を攻むることを議(はか)る。翌推古10年(602)2月には久米皇子(?)に新羅討伐を命じるが、6月に筑紫で逝去したため出撃は中止⇒新羅戦は無かった

推古9年(601)3月の任那支援要請と合致する欽明2年(541)4月条

④『書紀』推古9年(601)3月高句麗と百済に任那支援を要請

◆3月戊子(5日)に、大伴連嚙を高麗に、坂本臣糠手を百済に遣して、詔して曰く、「急(すみやか)に任那を救へ。」⇒60年前は「541年3月」

⑤『書紀』欽明2年(541)4月◆(天皇の詔を聴き)百済聖明王が任那各国と任那日本府の吉備の臣と会談。聖明王は「日本の天皇の詔したまふ所は、全(もは)ら任那を復(かへ)し建てよ」といふ。今天皇詔して、「速に任那を建てよ」とのたまふ。

⇒601年3月記事が60年前なら、541年3月に任那救済を要請する「詔」が百済に下され、これを受け百済聖明王と任那諸勢力が方策を検討した記事となる。

(541年)聖明王は「今新羅に誑(あざむかれ)て、天皇を忿怒(いか)らせ、任那に憤恨(うら)まれたのは、自らの過なり」という。これは「(600年条にあるように)新羅の降伏に欺かれて、それ以上攻めなかったのは誤りだった」という意味)

新羅の降伏に欺かれ軍を引いたのは600年記事。欺かれ怒ったのは541年記事。60年前記事と対応している



### 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ(4) 622年の新羅戦は562年からの繰下げ

『書紀』600年～601年と540年～541年の新羅戦記事を比較すれば、600年～601年記事は「60年繰り下げ」られた本来540年～541年の記事であり、**新羅討伐戦は多利思北孤の戦ではなかった**ことがわかる。

562年に「滅びた」のにもう一度新羅に滅ぼされた任那

これも実際は「60年繰り下げ」による虚偽だった

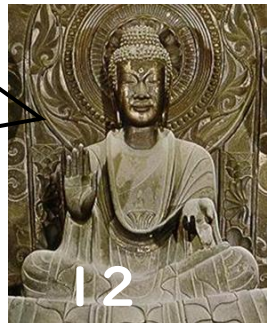
◆推古30年(622)是歳、新羅、任那を伐つ。任那、新羅に付きぬ。(「岩崎本」による。岩波『書紀』が底本とする「天理本」他の版本は623年のこととし、推古30年(622)は空白となっている。この点、干支の研究で「岩崎本」が正しいことが分かっている)

**一度亡びて、復活した形跡の無い任那が、再び同じ新羅により滅ぼされるのは不可解**。(『書紀』欽明23年(562)正月に、新羅、任那の官家を打ち滅しつ。〈一本に云はく、21年に、**任那滅ぶ**といふ。〉)しかし、この記事の「**一運(60年)**」前は**562年**で、「**『書紀』欽明23年(562)春正月に、新羅、任那の官家を打ち滅しつ**」との記事と見事に一致する。622年記事では、任那併合を受け、境部臣らが数万の軍を率いて新羅を討伐に任那に到るが新羅王が降伏するというのでこれを受け入れる。◆推古30年(622)是歳是に、新羅国王、軍(いくさ)多に至ると聞きて、予め懼(お)じて服(まっろ)はむと請(まう)す。天皇、聴(ゆる)したまふ。

**562年記事も将軍が派遣され任那に至るが、新羅は「降帰附(降伏)」するといい、これも一致する**◆欽明23年(562)7月是月。大將軍紀「男麻呂」宿禰を遣し、兵を將て哆唎を出づ。(略)新羅、更た白旗挙げて、兵(つはもの)を投げて隆首(したが)ふ。⇒622年の一連の記事も、実際は562年の任那滅亡譚の「60年繰り下げ」による再掲だった。

『書紀』の「聖徳太子(本来多利思北孤)」時代の600年・601年、622年の「対新羅戦記事」は「1運60年前」の540年・541年、562年から繰り下げられたもので、『隋書』や「17条憲法」どおり**聖徳太子(多利思北孤)は征服戦争はしなかった。**

我は国を治めるに仏教をもってし、憲法で「和を以て貴し」と定め、征服戦争を放棄したのだ。





### 3、「半島出兵」の1運(60年)繰下げ(5)60年前と同じ大將軍・副將軍での新羅討伐

大將軍・副將軍の名が一致する622年記事と562年記事

①622年の新羅討伐記事の大將軍は境部臣「雄摩侶」(をまろ)・副將軍は「河辺臣禰受」(にへ)

◆『書紀』推古30年(622)是歲、新羅、任那を伐つ。任那、新羅に付きぬ。是に天皇、將に新羅を討たむとす。(略)是歲に大徳境部臣雄摩侶(をまろ)・小徳中臣連国を以て大將軍とし、小徳河辺臣禰受(にへ)・・・小徳大宅臣軍を以て副將軍とす。数万の衆(いくさ)を率(ゐ)て、以て新羅を征討(う)つ。⇒半島渡海前の記事

562年の大敗北した新羅討伐戦の大將軍も「男麻呂」・副將軍も「河辺臣」瓊缶(にへ)

欽明23年(562)「紀男麻呂(をまろ)宿禰」を大將軍とする兵が哆唎・瓊缶(にへ)居曾山(こそむれ)を出て任那に到着、新羅を問責し降伏させるが、「副將河辺臣」の暴走で大敗北し任那は滅亡する。

◆『書紀』欽明23年(562)7月是月。大將軍紀「男麻呂」宿禰を遣し、兵を將て哆唎を出づ。副將「河辺臣」瓊缶(にへ)、居曾山(こそむれ)を出て、新羅の任那を攻る状を問はむとす(略)新羅、降歸附(まうしたが)はむと乞(まう)す。(略)河辺臣瓊缶、独り進みて転鬪(いよいよたたか)ふ。向ふ所皆抜く。新羅、更た白旗挙げて、兵(つはもの)を投げて隆首(したが)ふ。・・・新羅の鬪將・軍を進めて逆(むか)へ戦ふ(\*逆襲)。鋭を尽してとく攻め破りつ。(＊倭国の)前鋒(さき)の傷(やぶ)る所、甚だ衆(おほ)し。倭国造手彦、自ら救ひ難きを知り、軍を棄て遁(のが)れ逃ぐ。(略)鬪將、自ら營の中に就(い)りて、悉に、河辺臣瓊缶等、及び其の随へる婦を生けながら虜にす。⇒これは半島渡海後の記事。

『書紀』は562年記事を2分割し、渡海前記事を60年繰り下げた。

562年

大將軍紀「男麻呂」

副將「河辺臣禰受」

622年

大將軍「雄摩侶」

副將軍「河辺臣瓊缶」

60年たっても  
同じ大將軍と  
副將軍のコンビ  
は無いよね。



任那奪還戦は6世紀中葉の出来事で「筑紫の勢力」が活躍した時代。『書紀』はこれを60年繰り下げることで「半島で新羅と覇権を競ったのは九州の勢力」であることを隠したが、大將軍・副將軍の名を残してしまった。